

「都ぞ弥生」と50年

番場 公雄

50年前の4月上旬、桜も散り終えた大阪を離れ、季節遅れの大雪の札幌に到着した。大きな荷物を掲げ、ぬかるむ雪道に足をとられながら下宿探しをした時の心細い気持ちは忘れられない。しかし、入学して1ヶ月も経つと春が訪れ、美しい自然が私の気分を一変させてくれた。芝生の緑が濃くなった中央ロインでは、応援団主催の寮歌練習が行われ、初めて寮歌「都ぞ弥生」に出会い、その後恵迪寮でも1年間過ごした。作詞

者の横山芳介氏と静岡市とは深い所縁があることは静岡に来てから初めて知った。静岡市では毎年寮歌祭が開催され、昨年の36回静岡寮歌祭では、23の学校から200人あまりが出席するほどの盛況であった。背筋を伸ばし、年齢を感じさせない陸軍士官学校出身者のような例もあるが、旧制出身者の年齢は80歳を超えて参加者も年々減少し、残念ながら来年度の38回目で幕を降ろす。寮歌祭では、我々に出番が回ってきて「都ぞ弥生」を歌い始めると、それまでは談笑していた他校出席者もいっせいに歌い始める。このとき「都ぞ弥生」が正に日本の3大寮歌の一つであることを実感する。横山芳介氏は東京の出身で、明治43年3月に札幌農



寮歌祭にて
右から二人目が鈴木氏、三人目が筆者
(撮影者は通寮同窓会東日本支部副支部長の関口光雄氏(工学部出身))

科大学を受験し、合格している。歌詞の1番の最終節「人の世の清く国ぞとあこがれぬ」は、半年後(当時は9月入学)に訪れることになった札幌への想いを表しているのであろう。しかし、札幌の第一印象は思い描いていたものとは少々違っていたようで、札幌到着直後に住む街並みを見て、東京の友人に「仁丹の広告も一つない街」と書き送ったという(小作官横山芳介の足跡・田嶋 塩谷大高著、北大図書刊行会)。自分も母親に到着直後の心境をやや大げさに書いた手紙を送り、痛く心配させてしまったことが今も心残りである。

農学科を卒業した横山芳介氏は、大正7年に静岡県農会技師として静岡市に赴任し、静岡県技師や小作官を歴任し、戦前の静岡県農業の発展に多大な貢献をした。しかし、昭和13年に多くの人々に惜しまれて46歳で生涯を閉じ、墓は静岡市内の長源院にある。清き国、札幌には卒業後一度も訪れることはなかったという。静岡時代の活躍ぶりは前出の小作官横山芳介の足跡に詳しく記されているが、現場重視の仕事ぶり、先の時代を見通したものの考え方には感嘆する他ない。

現在、長源院境内には3代目に相当する「都ぞ弥生」の歌碑がある。この歌碑建立に尽力された1人が、昭和25年に農学科を卒業した鈴木脩造氏である。卒業後は実家の農業を継ぎ、後に静岡県農協中央会や家光協会の会長などの要職を勤め、戦後の静岡県農業の発展につくされた。なお、「都ぞ弥生」作詞者の長男である芳男氏とは中学時代の同級生であったという。同氏は今も無類の寮歌愛好家であるが、自宅にある桜の木の下に集い、寮歌を歌い、酒を酌み交わすことを寮歌好きの仲間が心待ちしており、その日も間近である。

静岡寮歌祭は残すところ2回となったが、横山芳介氏のゆかりの地の探訪を兼ねて多くの方々に参加されることをお勧めしたい。

(畜産・昭38卒)